

階級社会学における

「中間層」研究の理論的課題

Ⅲ. 目的・対象・課題

小 関 三 平

1. 「中間層」研究の目的

前章で、われわれは、いわゆる「中間階級」論の誤りと、「中間層」研究がふまえるべき基本的原則を、あらためて確認しておいた。だが、本章でわれわれ自身の立場と研究枠組を積極的に示すにあたって、まず、何のために「中間層」研究が必要なのかということを、明らかにしておかねばならない。もちろん、そのことは、階級論それ自体のレーゾン・デートルにもかかわっているのである。

われわれにとって、社会学は、現代資本主義社会の病理的構造を具体的に研究するものでなければならない。⁽¹⁾この立場は、「価値判断の排除」と「科学的中立性」という幻想を美化して、社会悪と人間破壊の現実を看過ないし肯定することとは、明確に対立するのである。われわれの社会学は、端的に云えば＜体制批判＞を課題としており、体制変革への理論的貢献を志している。

云うまでもなく、この見地に立つかぎり、社会の骨格をなす階級現象の研究は、もっとも重要な戦略的拠点の一つとして現われる。つまり、階級論は、われわれの社会学の根幹にはかならない。ところが、残念なことに、階級現象の具体的研究はきわめて貧しく、多くの問題領域が、十分に掘り起されることなく放置されている。「中間層」問題は、まさにその一例なのである。もちろん、それは、一昔前に比べれば、関心を集めている。しかし、その関心は、必

ずしも明確な目的意識を伴ってはいない。

もっとも、社会民主主義者にとっては、「中間階級」論の目的は、きわめて明確である。それは、「中間階級」の「増大」を強調し、その機能の「独自性」を主張することによって、マルクス主義の「時代錯誤」を指摘しながら、「中間階級」の「調停」的役割と、それによってイニシャティヴをとられるべき「社会改良」への期待を、大衆に向って語りかけようとする。ベルンシュタイン以来、さまざまに編曲されて口ずさまれる社会民主主義者の「Cant」⁽²⁾の主題は、一貫してこのようなものであった。彼らの無知と善意にたいしては、あまり不寛容であってはなるまい。しかし、彼らの果す客観的な＜機能＞を見逃すことはできない。こうした「中間階級」論は、プチブル的自尊心をくすぐるだけでなく、一見したところ温和で知的な感じを与え、しかも進歩的な装いを持って現われる。それだけにいっそう、現代支配層にとっては好都合なイデオロギーとなるのである。なぜなら、社会民主主義＝社会改良主義は、結局のところ、修正資本主義にはかならず、修正資本主義こそ、現代支配層の生きのびるただ一つの道だからである。

これに対して、ベルンシュタインにたいするカウツキーの反論⁽³⁾以来、マルクス主義者たちの「中間層」論が努力してきたのは、独立的「中間階級」の存在を否定し、「中間層」の衰退＝プロレタリア化を指摘し、労働者階級との「同盟」の必然性を論証することであった。その場合、重点をおかれた具体的な作業は、すでにふれたように、マルクス・エンゲルス・レーニンの諸著作を引用し敷衍しながら、社会統計を利用して階級構成の変化を証明し、「中間階級」論の欺まんの性格を告発することであった。もちろん、こうした「中間層」研究の目的は、社会主義への移行過程に横たわる戦術的課題の一つとして、いっそう多くの「中間層」成員を、労働者階級が中心となる「反独占」の陣営に獲得することにある⁽⁴⁾。こうした目的意識の形成にとって前提となっているのは、「中間層」が、

- (1) 無視できぬ量的比重を占める
- (2) 階級関係の干渉要因の一つをなす
- (3) 社会主義建設に貢献しうる

ということの認識と判断であろう。

われわれの研究の根本目的も、それと異りはしない。ただし、目的と手段の体系は、一つのヒエラルヒー的秩序をなしており、ある目的はいっそう高次の目的の手段であるし、また、いっそう低次の目的の段階的達成を手段として要する。この「目的のヒエラルヒー」的観点に立てば、「中間層」研究は、すでに述べた「体制変革」—「体制批判」—「社会学」—「階級論」という段階的系列の一環であると同時に、それ自身が、いっそう低次の(副次的)諸目的を従属せしめねばならない。だが、この意味では、これまでのマルクス主義的「中間層」論は、必ずしも、つねに明確・妥当であったとは思えない。というのは、それが、もっぱら、「プロレタリア化」の傾向や「労働者階級との同盟」の必然性の＜論証＞に止まり、しかも、その「同盟」の現実化にとって必要なのは、「労働者階級内部の統一」である——といった実践的課題の強調に終ることが多いからである。前章で指摘したように、アンドレーエヴァの論文の物足りなさも、そこにあった。

なるほど、レーニンは、「＜社会の同情＞も、生活諸条件の改善も、昂揚した闘争の結果である」と云い、「マルクス主義者は、労働者にむかって、諸君が強いときに諸君は＜社会＞の同情をえるであろう、と云う」と述べた。この場合の＜社会＞とは、彼の注釈に従えば、「ありとあらゆる民主的な諸層」を指し、「小ブルジョワ、農民、労働者の生活に接触しているインテリゲンチヤ、会社員など」にほかならない。⁽⁵⁾ところが、その同じレーニンは、別のところで、左翼小児病をいましめながら、「前衛だけで、勝利することはできない」ことを強調したさいに、不可欠な前提は、「労働者階級の大多数」の見解に「転換」が生じることであり、「広汎な大衆」が、「大衆自身の政治的経験」を通じて、前衛を「直接に支持」するか、あるいは少くとも前衛にたいして「好意的中立」の立場をとり、「前衛の敵」を支持しないようになることだ、と指摘した。⁽⁶⁾

ここで彼の云う「大衆」は、「労働者階級全大衆」に限定されている。しかし、今日の「反独占」カンパニヤへの要請のもとでは、「直接の支持」あるいは少くとも「好意的中立」を「中間層」の間でも獲得していくことが、必要で

あろう。もちろん、このことは、今日のマルクス主義の常識である。だが、そうした目的は、単に「プロレタリア化」と「労働者階級との同盟」の＜必然性＞を論証するだけでは、達成されない。もっと積極的に、「中間層」の「政治的経験」が深められる過程での＜はたらきかけ＞が、強化されねばならないだろう。では、「中間層」への＜はたらきかけ＞は、いかにして効果的たりうるか——それが問題なのである。

つまり、「中間層」研究の根本目的は、いっそう多くの「中間層」成員を「反独占」陣営に獲得することなのだが、そのためには、若干の副次的目的の達成が必要であり、「中間層」への効果的な＜はたらきかけ＞の条件の追究は、その一つに属する。そして、この目的の達成は、さらにいっそう低次の目的として、「中間層」の客観的な生活諸条件の＜現状分析＞が実現されることを前提として、可能となるのである。その場合に重要なのは、前章で指摘したように、「有利な条件」の分析のみに専心してはならないということである。なぜなら、「中間層」も現代資本主義の病理的構造の中に位置づけられているかぎり、さまざまな阻害的諸要因によって、「社会主義的改造の見通しを卒直に受けいれ⁽⁷⁾」て「はかりしれぬほど輝かしい仕事⁽⁸⁾」をなすことを、さまたげられているからである。したがって、われわれは 現状分析の重点を、むしろ「不利な条件」の分析におくべきだと考える。阻害的諸要因を認識することなしにその克服はありえず、その克服なしに前進はありえない。

現状分析のさいに重要な第二の注意は、「中間層」の客観的な生活諸条件を、歴史的な具体的状況のなかでとらえることである。このことは当然であり自明であるが、これまでのマルクス主義的「中間層」研究は、ややもすれば、資本主義社会すべてに共通の「一般法則」の論証に止まりがちであり、この点での成果は、あまり豊かとは云えない。しかし、云うまでもなく、＜現状＞はつねに歴史的・具体的であり、一般法則は、それぞれの社会に固有な特殊的・個別的現実を通じて具現する。したがって、われわれは、現代日本という時間的・空間的に限定された固有の歴史的現実のなかで、「中間層」を具体的にとらえねばならない。つまり、現代日本資本主義の階級関係のダイナミックスのなかで、「中間層」を取り巻く経済的・政治的・思想的な状況を、多面的・立

体的に分析することが、必要なのである。

ところで、このことは、実は、「中間層」研究の目的にたいして、重要な意義をもつ。なぜなら、現代日本の歴史的現実には、「対米従属」という客観的事実によって規定されており、「体制変革」＝社会主義への移行と、植民地主義・帝国主義からの「民族解放」という課題が、切り離しがたく結びついており、したがって、社会学一階級論—「中間層」研究の目的は、このことによって規定されるからである。この意味で、現代日本の「中間層」研究の根本目的は、単に「反独占」陣営の強化と云うだけでは不十分であり、むしろ「反帝・反独占」陣営の強化と云うべきであろう。このことは、のちに述べる当面の研究課題にも影響し、たとえば、「対米従属」や「中国敵視」が「中間層」の生活条件におよぼす結果や、「中間層」の民族意識や対外感情などの分析を、われわれに要求することにもなるわけである。

さて、このようにして、われわれ自身の「中間層」研究の目的が設定される。もう一度端的に云えば、それは、現代日本の「中間層」を「反帝・反独占」陣営に獲得することを根本目的とし、そのための現状分析をなすことを直接目的とするものにほかならない。そして、実はこのことが、われわれ自身の個人的生活の実践的課題に結びついているのである。⁽⁹⁾なぜなら、われわれ自身が「中間層」の成員であり、「中間層」の生活諸条件のもとで実際に生きながら、したがって、現代日本資本主義の病理的構造を、それぞれなりに実感しつつ、しかも、社会主義への移行＝体制変革の過程に参加することを望んでいるからである。この意味からすれば、「中間層」研究の目的は、「中間層」の「反帝・反独占」陣営への「獲得」というより、むしろ、「参加」と云うべきである。⁽¹⁰⁾つまり、「中間層」成員としてのわれわれ自身が、現代日本の歴史的現実のなかで、いかなる方向を目指すべきか、いかなる形で歴史形成に参加すべきか——この実践的課題を明確に自覚するための一過程として、「中間層」の現状をいかにとらえるべきか——という理論的課題が横たわるのである。

われわれは、こうした研究目的を自覚しながら、現状分析を行なわねばならず、現状分析の課題と方法を設定しなければならない。しかし、その作業に着

手するまえにやっておかねばならないことがある。それは、われわれの研究対象の明確化であり、つまり、「中間層」の概念をめぐる混乱を整理し、その具体的な内容を限定することである。本稿は、本章に入ってもなお、序論の域をこえることができないわけである。

註 (1) 社会学の成立根拠と現実的課題については、対象論・方法論をふくめて、近く稿を改めて論じてみたい。

(2) ベルンシュタインは、「社会主義の諸前提と社会民主主義の課題」(1899)において、「第5章の副題をカント (Kant) 対カント (Cant)」としている。

「Cant」は、彼の説明するように、「或る目的のために利用された偽りの語法」を意味するが、彼は、「科学的社会主義」が Cant にまで「退化」していることを嘆き、ドイツ社会民主党は、「伝統的の教義を酷烈犀利に批判」するべき、「一人の Kant」を必要とする——と述べた。しかし、われわれはここで、この「偽りの語法」としての Cant という言葉を、ベルンシュタインやもろもろの社会民主主義者にむかって投げ返しておこう。

cf. ベルンシュタイン「マルキシズムの改造」(松下芳男訳、世界大思想全集第47巻所収、1928年、春秋社)

(3) たとえば、彼の「ベルンシュタインと社会民主党綱領」(1899)。

cf. カウツキー「マルキシズム修正の駁論」(山川均訳、世界大思想全集第47巻所収、1928年、春秋社)

ちょっと断っておくが、カウツキーに対してはマルクス主義内部で批判が行なわれてきたにしても、一定の時期において彼の果たした貢献をも否定ないし無視することは正しくあるまい。

(4) こうした動向については、本稿の第Ⅰ・Ⅱ章ですでにふれた。但し、もっと詳細にあとづけることも重要であろう。

(5) レーニン、「政治的ストライキと経済的ストライキ」(レーニン全集第18巻、1964年、大月書店)、p.79

(6) レーニン「共産主義における<左翼>小児病」(朝野勉訳、改訂版、1965年、大月書店)、p.114~5。

(7) ドリーユ、「新<中間階級>」(北原道彦・茂木一郎訳、田沼肇編「現代の中間階級」所収、1958年、大月書店)、p.92。

(8) グラント「社会主義と中間階級」(西村勝彦・長谷川善計訳、1959年、理論社)、p.50。

(9) 人間形成と歴史形成の対応についてのわれわれの見解は、やや単純化された形でではあるが、次のものに示しておいた。「社会体制と人間像(2)」(作田啓一編「人間形成の社会学」所収、現代社会学講座第V巻、1964年、有斐閣)、p.132~4
但し、この問題は、さらに立ち入って検討する必要がある。

(10) 「参加」といっても、サルトルのいう engagement と同じ意味ではなく、日常的な意味での「参加」にすぎない。ただ、「獲得」という言葉は、厳密に言えば「中間層」に属していない者のみがいい得るものであるから、もっと主体的な態度を表現するためには、むしろ「参加」というべきである。われわれにとっては、「中間層」研究を行なうことそれ自体が参加の一形態であり、また、その結果もたらさるべき正しい理論的認識を通じて、いっそう効果的に「参加」することができよう。

2. 「中間層」研究の対象

云うまでもなく、「中間層」という概念は、通常、「中間階級」概念との二者択一において選ばれたものである。マルクス主義者が後者を拒む理由の一つは、ブルジョワ社会学者のいわゆる「中間階級」が、あまりに雑多な要素をふくんでおり、それを一つの独立せる統一的な階級として、ブルジョワジーやプロレタリアートと同列に論ずることはできない——というところにある。これはまったく正しい。では、「中間諸階級」と複数形で呼ぶ場合はどうだろうか？ その場合でも、今日の多くのマルクス主義者の多くは、拒否するであろう。なぜなら、彼らは、そのような名で呼ばれる諸集団の存在は認めるにしても、そのそれぞれを一つの「階級」とみなしはしないからである。彼らは、それを、むしろ「層」と呼ぶ。

しかし、実は、ここに一つの混乱がある。今日のマルクス主義の多くは、まず、(1) 社会には二つの基本的な階級があるが、しかし、(2) 階級構成は二大階級のみ還元されない————ということを認める。これは、二大階級以外の<非基本的>な「階級」の存在を暗に肯定していることになる。しかし、彼

らの多くは、それが具作的にどのような「階級」であるかを明かにしない。

たとえば、グラントは、「二つの基本的な敵対する階級」の「あいだ」に、「現在そのいぜれの階級にも属さず、また生産手段にたいしてなら共通の關係ももたない種々さまざまな中間のグループ」が存在することを認めるが、これを「中間層 (middle strata)」あるいは「中間部門 (middle sections)」と呼ぶ。⁽¹¹⁾ アンドレーエヴァは、これを引用しながら、「一連の介在的な中間諸層 (ряд промежуточных средних слоев)」の存在を肯定しており、これはすでに前章でふれられた。また、アルダーエフとヴェーベルは、「多数で雑多な中間諸層」が、ブルジョワジーとプロレタリアートの間の「中間的・介在的な位置」を占めていることを指摘し、それを、「階級的両極の間をゆれ動く社会的諸集団の総体」と定義している。⁽¹²⁾ ドリーユは、もっとルーズな用語法を採っており、「中間階級」という概念が内包する社会的現実の实在——社会構造の中に「中間地帯」が存在するかぎり、それは「曖昧だが放棄するわけにはいかない」としておきながら、「社会の中間諸層」は雑多であるから「中間階級という概念には限界がある」と云う。⁽¹³⁾ ここでは、「層 (couche)」と「階級 (classe)」は、暗黙のうちに区別されているにすぎない。しかし、ミュリーの用語法もまた、あいまいである。彼は、基本的な二つの階級の中間にひろがる「より動揺的で、より不確実で、より限界のはっきりしない一つの社会」を指して、「中間階級というよりも中間層という方がよいことはもちろんである」としながら、「二つの陣営のどちらにも属さずに社会生活のなかに入りこみ、以前の社会構成からくるかあるいは新しい生活条件によって生れるかする階級あるいは層」を「中間諸階級あるいは中間諸階層」とする。⁽¹⁴⁾ ただし、ブービエ＝アジャムとの共著の中では、自由職業・職人・農民・商人などを「中間階層」とすると同時に、「習慣への譲歩」によって「中間諸階級」と呼んでもよいと云っている。⁽¹⁵⁾ これは前章でふれた。

いまあげた例には、「中間（諸）階級」という概念をまったく用いない場合と、それと「中間（諸）層」という概念を必ずしも区別しないで、しかし、前者は条件づきでのみ用いるという形で、いわば消極的に承認する場合とが、ふくまれている。だが他方では、比較的古いマルクス主義者の間には、「中間

「(諸)階級」という概念が、むしろ当然のこととして用いられている場合がある。ブハーリンがそうだし、カウツキー⁽¹⁶⁾しても、「旧中間階級」と「新中間階級」⁽¹⁷⁾とに分けはしたものの、「中間階級」を否定したわけではなかった。グリュンベルクの場合も同様である⁽¹⁸⁾。しかし、現代ソビエトのセミヨーノフ⁽¹⁹⁾の場合は、もう少し複雑であり、マルクスやエンゲルスの用語法を検討したあとで、「資本主義社会では、中間階級は農民の階級と都市小ブルジョワ階級の階級とである」とすると同時に、インテリゲンツィヤ、職員、自由職業者、技術専門家などは、「資本主義社会の独立した社会階級をなすものではなくて、中間的な社会諸層なのである」と云う。

では、いったいマルクスやエンゲルス自身はどうであったか？ セミヨーノフも指摘するように、マルクスは「中間身分 (mittelstand)」や「中間(諸)階級」という表現を用いているし、エンゲルスも、「中間階級」とか「中間階層」⁽²⁰⁾という表現を用いているが、彼らは、それほど神経質に概念規定を行なわなかったのだと考えるほかない。ただ、たしかなのは、彼らが「中間(諸)階級」と云う場合、もっぱら、農民とか小市民を指すことが多かったという点であろう。しかし、それにしても、生産手段の所有者と非所有者の二大階級に分けたはずの彼らが、なぜ、「中間(諸)階級」などにふれたのだろうか？ これは当然の疑問であり、ここで一種のアポリーアに直面することになりそうである。

この点については前章で少しふれたが、もう少し詳しく、われわれの解釈を試みることにしよう。まず、彼らが、

- (1) 生産手段の所有・非所有を重視し
- (2) 二つの基本的な階級を分けたが
- (3) 「中間(諸)階級」をも認めた

ということを確認しておこう。もし、生産手段の所有・非所有というメルクマールにこだわれば、形式論理的には、階級は二つしかありえない。ところが、このメルクマールは、実は二重性を持っていて、「剰余価値」の搾取・被搾取ということをもふくんでいるのである。レーニンが例の有名な階級の定義の中で「一方が他方の労働を専有できるような人間集団」ということを云ったの

は、この意味であった。

この点を考慮すると、次の二つの等式が成り立つように一応はみえる。

生産手段の所有 = 剰余価値の搾取

生産手段の非所有 = 剰余価値の被搾取

ところが、じっさいには、これだけでは資本主義社会の階級構成は充分にはとらえられない。というのは、形式論理的には生産手段を「所有」していても直接「搾取」しないと考えられる者と、生産手段を所有していないが、剰余価値を生産せず、したがってそれを搾取されないと考えられる者があるからである。この意味からすると、論理的には、

- $$\begin{array}{l} A \left\{ \begin{array}{l} (a) \text{ 所有・搾取者} \\ (b) \text{ 所有・非搾取者} \end{array} \right. \\ B \left\{ \begin{array}{l} (c) \text{ 非所有・非被搾取者} \\ (d) \text{ 非所有・被搾取者} \end{array} \right. \end{array}$$

というふうに、二つの基本的カテゴリーと、四つの副次的カテゴリーが区別されることになる。マルクスやエンゲルスが「中間身分」または「中間階級」と云うとき、もっぱら (b) = 農民。小市民を指し、「中間諸階級」あるいは「中間諸層」と云うときには、(b) と (c) を包括していると考えてよからう。もちろん、のちに「旧中間階級」または「旧中間層」と呼ばれるようになったのは (b) であり、「新中間階級」または「新中間層」と呼ばれるようになったのは (c) を中心としている。

しかし、次の問題は、「基本的」な「二大階級」とは、AとBを指すのか、それとも、(a) と (c) を指すのか——ということである。もし前者だと解すれば、「副次的」な階級は同じレベルでは存在しないことになる。ところが、マルクスやエンゲルスは、「中間（諸）階級」について語っているのだから、これは矛盾する。つまり、彼らの云う「基本的」な「二大階級」は、(a) = ブルジョワジーと (d) = プロレタリアートだということになる。「両極化」というのも、その文脈で理解されるべきであろう。

しかし、資本主義社会にとって、生産手段の私有という制度は、決定的な意

義を持つから、やはり、生産手段の所有・非所有というメルクマールは、第一義的重要性を持つ——とわれわれは考える。したがって、AとBを＜大別＞することは重要である。とすれば、Aを「広義の資本家（ブルジョワジー）」、Bを「広義の労働者（プロレタリアート）」⁽²¹⁾とでも呼ぶという形で、この用語法上の問題を解決することもできよう。この両者をも、＜基本的＞な階級と呼ぶことは許される。ただ、＜基本的＞という言葉は相対的なものであり、どのレベルで云うかによって違いがある。つまり、＜大別＞されるという意味で、資本主義社会の階級は、基本的にはAとBしかないが、それぞれの内部のサブ・カテゴリーを区分してみると、基本的に＜重要＞なのは(a)と(b)である——といったふうに、＜基本的＞という言葉は、二重の意味で使い分けるしか仕方がない。このような言葉の吟味は、退屈で煩瑣なものであり、詭弁めくようにも聞こえようが、正確さを期すためには、やむをえないであろう。

そこで、次に問題となるのは、上の分類では(b)と(c)にあたるものが、「中間（諸）層」にはほかならないとして、これを「中間的」な「階級」と呼ぶことの妥当性である。まず「階級」と呼ぶことについて吟味するとして、この点では、マルクスやエンゲルスの用語法は、いささか誤解を招きやすいと認めねばなるまい。なぜなら、彼らの階級論のもっとも重要な貢献は、AとBの区別にあり、それらの内部の区分は副次的と思われるからである。もちろん、そうしたサブ・カテゴリーを「階級」と呼ぶことはできるが、それは、むしろ、正確には、「副次級（sub class）」または「階層（stratum）」とでも呼ぶべきであろう。つまり、「広義の」とか「狭義の」とかいった限定をつけるよりは、AとBの「階級」のなかに、(a)～(d)の「階層」をふくむ——と云ったほうが、混乱の危険が少いように思われるのである。ただし、じっさいには、(a)と(b)の間には大きな差がさまざまな面で認められ、また(b)の量的比重はかなり大きいから、実際的には、(a)―(b)―(c)・(d)という三分法や、(a)―(b)―(c)―(d)という四分法が、まったく意味を持たないわけではない。しかし、論理上は、その場合、AとBの区別の意義が、多少ともぼやけよう。

次の吟味すべきは、(b)、あるいはそれと(c)を「中間的」と呼ぶことの妥当性についてである。まず、(a)と(d)を＜両極＞と考えれば、一応その「中

間」にあると云うことはできる。しかし、AとBの「中間」は、論理上ありえない。したがって、さきのわれわれの用語法上の提案からすれば、AとBとの間の「中間階級」はなくて、(a)と(d)の間の「中間階層」はありうる——ということになる。

しかし、今日のマルクス主義的「中間層」論者の多くのように、「層」を「階級」と別次元の集団とみなし、(a)と(b)の「いずれにも属さない」諸集団を「中間的諸層」と云うことには、無条件には同意できない。たとえば、「インテリゲンチヤ」は階級とは別次元に属するという考えは、レーニン以来あるし、それはもっともな理由を伴っている。しかし、農民や小市民はもちろんのこと、職員や技術者などが、「階級」と別次元に属すると、なぜ考えねばならないのだろうか。この点については、前章で述べたとおり、マルクス主義者の間にも見解の相違があり、たとえば、ソビエトでも、セミヨーノフらにたいして、レオンチェフらは批判的であり、(c)をも「プロレタリアート（広義）」に含めるべきだと主張している。われわれも、この意見に同意することは、これまたすでに述べた。⁽²²⁾ 職員や技術者も、剰余価値を生産しなくても、明らかに「生産体制の中で一定の地位を占めており」、しかも、生産手段を持たず、労働力を売って生活資料を得ているからである。かって戦前に、小池四郎が、「俸給生活者」を指して「準プロレタリアート」と称したのも、この意味からすれば、（少くとも「私営事業の傭人」にかんするかぎり）適切である。⁽²³⁾ 一般に、今日の日本のマルクス主義者の間では、職員＝事務労働者としてとらえるのが常識化している。他方、農民・小市民について云えば、セミヨーノフも認めるように、階級と別の次元に属するものではない。これは明らかに、広義の資本家（所有者）に属しており、程力群にしたがえば「小所有者階級」である。⁽²⁴⁾

つまり、(a)～(d)のレベルで「階級」をとらえ、「二大階級のみに還元されない」とし、(a)と(d)を「基本的」な階級とするなら、(b)と(c)を副次的な「階級」とみなすことはなんら矛盾しない。ところが、それらを階級とは別次元の「層」とみなすと、逆に、階級は二つだけということになり、＜二分法＞ではない」という主張は成立しなくなる。また、階級は二つだけだが、その中

間に階級とは別の「層」が介在すると云うなら、今度は、マルクスやエンゲルスが「中間（諸）階級」と云ったことが説明できなくなる。いずれにしても、矛盾におちいってしまうのである。

われわれは、むしろ、基本的には＜二分法＞を肯定し、そこにこそ、マルクス主義階級論の特質があると考え。ただし、そのうえで、さらに副次的なサブ・カテゴリーを区別し、これを「階層」と呼ぶことにしたい。さきの分類でいえば、(a) ～ (d) のレベルがこれにあたる。しかし、こうした階層にもいくつかのレベルを考慮することができ、(a) ～ (d) のそれぞれを、さらにいくつかの「副階層 (sub-stratum)」とも云うべきものに分けることもできよう。われわれが「層」という言葉を使うとすれば、それは、階級と次元を異にする集団ではなくて、単に、いま云った意味での「階層」の同義語としてであるにすぎない。下位の「層」、つまり「副階層」は、「間層」と云ってもよい。外国語で云えば、ここで云う「階層」も「層」も、stratum, couche, Schicht, слой, であり、「副階層」あるいは「間層」をしいて区別すれば、いずれも、sub-stratum, дрослойка ということになろう。ただし、この意味での「(階)層」は、社会学における「成層(stratification, Schichtung, стратификация)」の構成単位としての「層」ではない。また、日本語で「婦人層」とか「知識層」と云う場合の「層」でもない。このようなわれわれの用語法では、(1) 階級— (2) (階) 層 = 副階級— (3) 間層 = 副(階)層という三つのレベルがあり、「中間層」とは、「中間的諸(階)層」を指している。

ところで、「中間的」と云う表現は、この場合、第一義的には、＜兩極＞の間に「介在」という意味であり、いわば、一定の質的な特徴をふくんでいる。したがって、このニュアンスを強く出そうと思えば、外国語では、たとえば、intermediate, intermédiat, zwischenliegend, промежуточный という形容詞が適している。しかし、「中間的」という言葉には、別のニュアンス——つまり、「中等」ないし「中位」という意味もふくまれることがあり、そのときは、いわば一定の量的な水準を示している。もともと「中」という言葉は、二つの端または極からもっとも遠い位置を表わすと考えられ、すでにそれ自身の中に、この二種のニュアンスをふくんでおり、「介在」的ないし「中

「立」と、「中等」ないし「平均」的という両方の意味に用いられる。外国語の形容詞 — middle, moyen, mittel, средний も、この両方の意味に用いられる。「中間層」という場合も同様であって、第二義的には、いわば「中等層」または「中位層」という意味をもふくんでいる。このニュアンスは、「中間的」という形容詞だけでなく、それが「層」という語と結合することによって、いっそう強められている。

「(階)層」という語は、もともと、地質学から借りてこられたものであり、「地層」・「層理」とのアナロジーに由来する。つまり、それは、垂直次元＝上下方向での重層的構成を前提としており、各層間の段階的差等を伴っている。社会科学の概念として「(階)層」と云われる場合にも、このニュアンスは、やはり残されている。そして、社会科学の領域では、諸層の集成的な全体は、伝統的に「ヒエラルヒー」と呼ばれてきた。hierarchy というのは、もともと天使の位階に由来し、のちにカトリック教会内の身分的秩序を指すのに用いられたものであり、社会科学用語として日本に入ってから⁽²⁵⁾は、「体系的秩序」とか「階級的秩序」、あるいは単に「層(秩序)」というふうに移されてきたものである。ただ、ヒエラルヒーという語の場合は、単なる上下の段階的差等につきず、もともと、「身分」的序列と、「支配」的秩序というニュアンスが強かったと云える。ところが、社会学の中で生まれたいわゆる「成層」という概念は、まったく地質学と同じく stratification という語で表わされるが、上下の段階的差等と云っても、「身分」的序列や「支配」的秩序というニュアンスは失なわれ、複合的指標と量化的尺度によって測定された「社会的地位」のシステムを意味する。ここでは、いわば「連続」的な転移と「機能」的な統合というニュアンスが強い。

だが、いずれにしても、およそ「(階)層」なるものは、なんらかの基準にもとづく段階的差等を前提としており、いわば、量的差異にもとづく質的差異を伴っている。社会(階)層について云えば、さまざまな基準がありうるが、もっとも重視されるのは、＜所得＞であり、しばしば「所得階層」が論ぜられる。それは、権力からの距離に規定され、また貧富の尺度となり、他のさまざまな生活諸条件を規定するし、量的な測定が比較的容易だからであろう。マル

クスのみならず、「階級」を論じた人々は、階級の相違が所得ないし財産・収入の差異に、また社会的勢力に対応すると、大なり小なり考えたのである。つまり、支配＝富裕＝生産手段の所有の＜三位一体＞とも云うべき対応関係を、マルクスは考えている。もちろん、この対応関係は、個人のレベルで見れば、必ずしも厳密には認められない。ブルジョワ社会学の「階級論」がマルクス主義の階級論を批判・嘲笑する理由はそこにある。しかし、巨視的に、階級ないし階層のレベルで見れば、資本主義社会では、やはり、この三位一体は認められるのである。

さて、「中間的」なるものは、こうした意味での「中等所得層」＝「中産層」＝「中流層」でもあることが認められる。少くとも、巨視的には（たとえば、全体社会レベルで、その平均を見れば）、そう云えるのである。つまり、階級構成において中間的な諸階層は、その所得水準において、ほぼ平均的ないし中位的な位置にある。もっとも、このことを立証することになると、統計資料上の制約はまぬがれず、たとえば、全国レベルの所得統計で比較的有效な国税庁の申告所得金額階級別表では、申告所得と職業をクロスさせていないから、所得分布はわかるが、「中流層」の内容はわからない。残るのは、総理府統計局の家計調査と、経済企画庁の消費者動向予測調査だけである。周知のように、これらはいずれも、若干の制約をもっているが、それにもかかわらず、一定の有効性をもっている。そして、これらによって見るかぎりでは、常識的に「中間層」の代表的カテゴリーをなすとみなされる「個人営業」世帯や「職員」世帯の所得水準、したがってまた生活水準がほぼ「中位」を占める——つまり「中流」であることが示されているのである。

註 (1) グラント、前掲訳書、p.50

(2) Академия Наук СССР; Городские средние слои современного капиталистического общества (Нзд-во АН СССР, 1963), стр. 50.

(3) ドリーユ、「中間階級論」（田沼編前掲訳書所収）、p. 31.

(4) ミュリー、「中間諸階層の科学的定義のために」（カイエ・デュ・コムニスム編「労働者階級と中間階級」所収、小出峻訳、1961年、新日本出版社）、

p. 48. 23

- ⑫ M. Bouvier-Ajam et G. Mury; Les classes sociales en France
(Editions Sociales, 1964)、Tome II, p. 314.
- ⑬ プハーリン「唯物史観」(広島定吉訳、1930年、白揚社)、p. 499.
- ⑭ カウッキー、前掲訳書、
- ⑮ E. Grünberg; Der Mittelstand in die kapitalistische Gesellschaft
(Verlag von C. L. Hirschfeld, 1932) .
- ⑯ セミヨーノフ「＜中間階級＞の神話と資本主義の現実」(大谷孝雄訳、田沼
編前掲訳書所収)、p. 267.
- ⑰ こうした点については、セミヨーノフの前掲論文のほかに、次のものもかな
り詳しくあとづけている。
黒川俊雄「新中間層の諸問題」(「思想」、398号、1957) .
- ⑱ よく使われる「勤労階級」という言葉も、ふつうはこれを指している。
- ⑲ 「論集」、第11巻第3号、p. 18,
- ⑳ cf. 小池四郎「俸給生活者論」(1929年、青雲閣書房)、p. 17.
- ㉑ 程力群「マルクス・レーニン主義の階級闘争の理論」(橋本・工藤・山本訳
編、1961年、新日本出版社) p. 74～5.
- ㉒ cf. O.E.D. (1933)、vol V, p. 272.

さて、このようにして一応抽象的に定められた中間層の具体的な構成は、い
ったるどのようなものであろうか。つまり、ここで問題となるのは、さきに述
べた意味での「中間的階層」とは具体的になにを指すかということである。こ
れまでの「中間層」研究なるものは、実際には「ホワイトカラー」研究にすぎ
ないものが多く、「ホワイトカラー」を中心として「中間層」が論じられるこ
とがしばしばであった。しかし、ドリーユも指摘しているように、中間的諸
階層は「異なった基盤」に立っているから、「社会的闘争」における彼らの役
割を理解するためには、その「異なった利害」を「細部にわたって分析」する
ことが、まず必要な⁽²⁶⁾のである。

中間層の内部区分をおこなう場合、一般に用いられるやり方は、「旧中間
層」と「新中間層」の二分法である。たしかに、それは、中間層の内部に、資

本主義の発展に伴なって減少する部分と増大する部分のあることを示すに便利な概念である。しかし、この両者の具体的構成については、必ずしも単純でない問題がふくまれ、また、細部では論者の間に見解の相違がある。さらに、そのような見解の相違の自覚にまで至らず、明確な基準なしに構成要素が列挙される場合も少なくない。ここでは、個々の論者の区分の仕方をいちいち例示・吟味することは避けるが、いくつかの問題点を指摘しながら、われわれの現在の見解を示してみたい。

まず第(1)に、いわゆる「旧中間層」について云えば、a) 農民の位置づけと b) 上限の決定をめぐる問題がある。ドリーユは、フランス国勢調査をもとに中間層の構成を論じたさいに農民をふくめていないが、これは不可解なことであり、農民——農業資本家とは区別された意味での——は、狭義の「小市民(petite-bourgeoisie)」ではないにしても、「旧中間層」に属するとみなすのは、むしろ常識であろう。但し、農民と小市民では、生産過程における地位と役割が異なるし、労働の形態も同じではないから、これら両者を区別することは重要である。その意味では、W・ロシェやソビエトの研究者たちが、農民と「都市中間層」を区別していることも、農民の特殊性の自覚をもとにするかぎりでは正しい⁽²⁷⁾。但し、この両者を同一平面に並列するのは不正確である。というのは、もし、農民を旧中間層に属する一つの独自の層とみなすのであれば、「都市中間層」内部の諸カテゴリー——たとえば、いわゆる「手工業者」と「小商人」の間にも相違があり、これらの層もまた、相互に独立したものとして、農民と同一平面上に並列させるべきだからである。

ところで、農民をふくめた旧中間層の上限をどこに設定するかという問題は、いっそう厄介である。旧中間層は、ときとして、「中小零細企業」と等置されることがあるが、もちろん、これは正確でない、というよりむしろ誤りである。「中小(零細)企業」と云うときに普通は農民を入れないということは別としても、それを「大企業」から区別する場合の境界設定は、さまざまな形で試みられており、主要なのは、資本金・従業員数などを基準とする「経営規模」であると考えられている。しかし、すでにふれたように、われわれは、生産手段との関係を階級区分の基本的メルクマールとし、生産手段を「所有」し

ている者のうち「搾取」しない者のみを中間層にふくめるのだから、「経営規模」の量的差異——もっとも、質的差異と関連しているが——はむしろ副次的な意義しか持たないと考える。それよりも重要なのは、「雇用者」の有無であり、総理府の統計で云えば、「雇用者を持つ業主」と「雇用者を持たない業主」との質的な相違である。「家族従業者」は、もちろん「雇用者」に入らず、私有財産が一般に家族を単位とするかぎり、これは「搾取」されているとは云えない。したがって、われわれは、旧中間層を、せいぜい家族従業者を持つにすぎない独立自営業者に限定しようとする。農民についても同じであり、耕作面積や農業収入額の量的差異は副次的な意義しかない。

このようにして、われわれは、いわゆる「旧中間層」を、もっと具体的に<独立自営業者>階層として云い換えたい。さらにその内部の間層を、産業の別に応じて区分したい。さきにふれたように、産業の別は、社会的総生産過程における地位と役割の相違を、ある程度表わしており、少なくとも、農村と都市といった居住地域の相違よりも重要であろう。こうした独立自営階層は、垂直次元で——たとえば「所得階層」について見れば、いくつかの段階をふくんでいるが、独立した自己の土地・店舗・工場・事務所などを所有せずに、単に自己の労働手段を所有するにすぎない者は、むしろこれからははぶかるべきであろう。その意味で、たとえば、「道具」を持つだけの「職人」や「内職者」はふくまれない。また、これらの多くと同じく「半プロレタリアート」にしばしばふくめられる「露天商」や「行商」も、やはり独立自営業者にふくめないほうが、混乱を避けるために有効であろう。これらは、江口英一らが云うように、むしろ「名目的」自営業者にすぎないからである。⁽²⁸⁾

中間層の構成要素をめぐる第(2)の問題は、いわゆる「新中間層」にかんするものであり、細かく云えば、a)「公務員」の位置づけと、b)「ホワイトカラー」の上限の設定をめぐるものである。「公務員」を新中間層にふくめることについては、異論はみあたらないようだが、問題となるのは、それが、あまりにも多様な部門に拡がっており、また複雑な職階的ヒエラルヒーを有するからである。しかし、その大部分は、剰余価値を生産しない「事務労働」に属しており、投師をふくめるとしても、大部分が、事務所を労働空間とする desk-

work に主として従事していると云える。したがって、公務員の大部分は、いわゆる「サラリーマン」＝民間ホワイトカラーと同じく、「職員層」ないし「オフィス労働者」としてとらえられてよいだろう。但し、いわゆる「現業部門」の労働者——たとえば交通などの部門に働く公務員は、むしろ、「新中間層」に属せしめるよりは、生産労働者に準ずるものとみなすべきであろう。他方、いわゆる「中間管理職」および「高級官僚」は、多少とも権限を与えられて「ランク・アンド・ファイル」を指揮・命令するという意味で、職員層＝オフィス労働者としての公務員という場合には、はぶかれるであろう。このように考えれば、実は、「公務員」を新中間層の構成要素の一つとみなすことは、誤解と混乱を招きやすいのであって、むしろ新中間層＝職員層（中間管理職以上をのぞく）と等置したうえで、この階層内部の間層の一つとして、「官庁職員」を「民間職員」と区別するほうがよいと思われる。

次に、「この意味で官庁職員と民間職員をともにふくむ「ホワイトカラー（職員層）」の上限について云えば、（すでにいま若干ふれたことだが）、中間管理職を、民間企業の場合も「職員」からはぶくべきであろう。とくに重役以上の「トップ・マネージャー」層は、官庁統計では「雇用者」に属するとしても、実際には、資本の運用にあたることによって、「搾取」にあずかっていると云える。彼らは、むしろ、資本主義的所有制度に寄食しているとみなされてよく、「所有」と「経営」は、形式的・表面的に分離しているだけで、内容的・実質的には不可分のものと云わねばならないのである。この意味で、ドリーユらが、「幹部職員 (cadre)」をも中間層の構成要素にふくめていることに、われわれは同意できない。また、ドリーユは、「幹部職員」と「技師」をならべて一つのカテゴリーを考えているが、中間管理職以上のものを別とすれば、「技師」はむしろ、職員層内部のサブ・カテゴリーとして「事務職員」に⁽²⁸⁾対置さるべきであろう。

このようにして、われわれは、新中間層を職員階層として具体的に云い換え、そのうえでまず民間職員と官庁職員という二つの間層を区別し、さらに、それらのそれぞれを、事務職員と技術職員に分けて考えたい。しかし、職員階層の内部区分の基準として、とくにわが国で少なからぬ意義を持つのは、「学

歴」であり、とりわけ、大学卒業者＝「学卒ホワイトカラー」と短大・高校・中学卒業者の区分は、賃金や職階その他の面での相違を規定するうえで、かなり重要である。

中間層の構成要素について論じる場合に見逃せない第(3)の問題は、「インテリゲンチヤ（知識分子）」をめぐるものである。「インテリゲンチヤ」という概念の歴史の変遷過程についてはここではふれないことにするが、今日では、かなり狭く限定された社会科学的概念として用いられ、アンバルツ⁽³⁰⁾ウモフの定義によれば、「知的労働に専門的に従事する人々の特殊社会層」である。かつては、たとえば、カウツキーらのように、サラリーマン(Andestellte)や官吏(Beamte)、さらに学生をも、インテリゲンチヤにふくめるのが普通であったが、⁽³¹⁾今日では、それらを除外して、教師・研究者・医師・弁護士・芸術家・記者などの一群に限定される。技師は、しばしば、これにふくめられ、「技術インテリゲンチヤ」と呼ばれることがあるが、さきに少しふれたように、むしろ民間または官庁の職員層にふくめらるべきであろう。したがって、わが国の国勢調査にいう「専門的技術的職業」から技術者を除いた部分が「インテリゲンチヤ」であると考えてよいだろう。

このインテリゲンチヤは、職員層とともに、新中間層の構成要素の一つとして並列されるのが通例となっている。しかし、われわれのように階級・階層論の文脈で中間層をとらえる場合には、このような並列には同意できない。というのは、インテリゲンチヤが階級・階層とは別の次元に属する概念とみなさるべきだからであり、そのような考え方はレーニン以来の伝統をなし、またアンバルツ⁽³²⁾ウモフも指摘するように、そこでは「生産手段との関係ではなく、労働の性格が」問題となっている。じっさい、インテリゲンチヤの「従業上の地位」は雑多であり、独立自営する者と雇用される者とをともにふくみ、また「雇用者を持つ業主」の場合さえある。したがって、これを独立せる一つの階層として中間層の構成要素をみなすことはできない。むしろ、さきに述べたような職業への従事者は、独立自営業者階層あるいは職員階層の内部にある特殊なカテゴリーとして、そちらの方で扱われるべきであろう。但し、それだからと云って、インテリゲンチヤ一般に共通する問題が還元・解消されるわけではなく、

産業の別や業主—雇用者の別をこえた「インテリゲンチヤ問題」というものはありうるし、中間層——とくに新中間層との深い関連においてこれを論ずることは、これまで行なわれることがほとんどないにもかかわらず、重要であると思われる。われわれは、それについては、後日稿を改めて論ずるであろう。

さて、このようにして、われわれは、中間層の基本的な構成要素を決定することができる。もっとも、間層レベルの区分については、さらに検討の余地が残されるが、このレベルでは、旧中間層と新中間層では、その内部区分の基準が必ずしも共通でなくともよく、それぞれに応じてもっとも実際的かつ有効なものが選ばれてよい。旧中間層の内部では、もっぱら産業の別が重要であり、次いで居住地域と労働空間が一定の意義を持つが、新中間層の内部では、むしろ民間—官庁の別がまず重要であり、次いで労働空間と作業形態が一定の意義を持つ。また、もう一つの問題として残されるのは、このような中間層の内部区分は、あくまで基本的なものにすぎず、マージナル・ケースがありうるということである。しかし、階級・階層は、ほんらい巨視的・全体社会的範疇であり、あまりにも比重の微小な限界的事例はそれほど考慮しなくてもよく、むしろ、いわば＜中核＞的なカテゴリーを中心にすれば充分なのである。

3. 中間層研究の課題

われわれの課題は、云うまでもなく、前節で定められた対象の＜現状＞を分析することであり、それは、第1節に述べたわれわれの研究目的と不可分の関係にある。だが、それにしても、こうした対象のどの側面に、どのような角度から接近すべきなのか——ということを論じなければならぬ。われわれの社会学の課題は、現代日本（資本主義）社会の病理的構造を、具体的に追究することを通じて体制批判を行なうことにある。この立場からすれば、現代日本社会の病理的構造の中に中間層を位置づけることが、中間層研究の課題にはかならない。その場合に、われわれにとって重要なことは、すでに明らかにしたように、中間層が「中間的諸階層」であり、したがって階級論の文脈でのみとら

えられるということである。つまり、現代日本資本主義がはらむ不可避免的な矛盾の表われとしての階級対立と階級闘争の巨視的・歴史的なダイナミックスのさなかで、中間層＝中間的諸階層は、どのような位置を占め、どのような役割を演じつつあるのか、そしてとくに、それが＜反帝・反独占＞の陣営に参加するにあたっての阻害的諸要因と促進的諸要因は、いったいどこにあるのか——ということこそ、われわれの現状分析の根本課題にはかならない。もちろん、中間層は、全体として一つの階級的統一を持つわけではない。とりわけ、「旧中間層」と「新中間層」の間には、歴史的・形成基盤の相違があり、客観的な階級所屬において明確な断絶がある。そして、この両者それぞれの内部のサブ・カテゴリー（副階層＝間層）間にも、顕著な相違がある。中間層は、さまざまな異質的要素を内包しており、その内部の階層的利害は錯綜しているようにみえる。

しかし、このような異質性と多様性、したがって中間層の各構成要素の特殊性にもかかわらず、それらが同じく現代日本社会の階級構成において＜両極＞の「中間」にあり、全体社会のほぼ「中位」にあるという共通の事実、中間層全体の一般的特徴というものを、ある程度まで形づくるには充分であろう。およそ、中間層が論じられるかぎり、そうした一般的特徴ないし同質性・共通性を、なんらかの程度において仮定することが、その前提となるのである。

しかし、もちろん、このことは、社会民主主義的な「中間階級」論のように、いわば＜第三勢力＞として＜独立性＞をもった「階級」として、独自の歴史的使命や社会的機能を認めることと同じではない。中間層内部の一般的特徴なるものは、あくまで、類似の上の相違ではなく、相違の上の類似でしかない。このことは、とくに、「旧中間層」と「新中間層」の間について、忘れてはならない重要性をもつ、なぜなら、客観的な階級的条件において、これら両者間には決定的な相違があり、両者間の類似よりも、それら一方と基本的に階級を同じくする他の階層の間の共通性のほうが、いっそう強いからである。したがって、中間層研究は、結局のところ、その各構成要素の個別的把握を必要とすることは云うまでもない。ただし、その位置づけなり、特質の把握なりは、それらの相互的諸連関、および、それらのそれぞれと＜二大階級＞との相

互的諸連関のなかにおいてのみ、なされることができるのである。この意味から、われわれにとって、中間層の内部の諸階層のあいだの社会的関係と、中間層外部の諸階層にたいする社会的関係を、各副階層＝中間層のレベルにまでおりながら、できるかぎり詳細かつ具体的に分析し、それらの共通性と差異性を明らかにしたうえで、全体として中間層を、階級対立と階級闘争の巨視的・歴史的ダイナミックスのなかに位置づける——ということが課題となるわけである。

このような中間層をめぐる社会的諸関係を分析するという課題を前にするとき、われわれは、いかなる項目を、いかなる手続きで扱うべきであろうか。それは、決して単純な問題ではないが、ここでは、基本的な視角を定めるに止めておこう。ブルジョワ社会学的な研究は、この領域を対象とすると、中間層の「帰属意識」や「生活意識」を、その客観的な階級条件から切り離して「調査」し「疎外感」や「政治的無関心」を強調する。彼らがふれる客観的な条件とは、せいぜい、「官僚制機構」とか「大衆社会状況」にすぎず、階級的・階層的に規定された生活諸条件の正確な把握を欠いている。

しかし、われわれは、中間層を階級論の文脈でとらえるのだから、それを構成する諸階層の階級条件の分析を、具体的かつ詳細に行なうことが、中間層研究の現状分析にとって、出発点とならねばならない。なぜなら、その基礎に立脚することによってのみ、現代日本独占資本主義のもとでの中間層の客観的な生活諸条件と、中間層が独占資本によって期待されている役割、それが実際に独占資本のために果たしつつある機能、しかし同時にまた、中間層と独占資本の間の客観的な利害の対立的側面、中間層と生産労働者の間の客観的な利害の同一的側面をも、正確にとらえることができるからである。

この角度からの具体的な接近にあたって、階級にたいするレーニンの古典的な定義は、示唆に富んでいる。周知のように、彼は、なりよりもまず、(1)「歴史的に規定された社会的生産体制のなかでの地位」を基本的なメルクマールとしたが、それは、具体的には、(2)「生産手段にたいする関係」を意味し、またさらに、(3)「社会的労働組織のなかで果たす役割」と、(4)「社会的富の分けまえ⁽³³⁾をうけとる方法と分けまえの大きさ」の相違をも伴うとされる。これら

は、彼の定義にあっては不可分に結びつけられており、程力群の指摘するように、「階級区分の四つの特徴を関連させる」ことは重要である。⁽³⁴⁾しかし、そのことは自明であるとして、われわれがここで関心を払うのは、「四つの特徴」を区別したことにたいしてである。もちろん、レーニンは、「一定の社会経済制度のなかで占めるその地位がちがうことによって、そのうちの一方が他方の労働をわがものとすることができるような、人間の集団」として、この定義をしめくくっており、いわば＜両極＞間の敵対関係を強調している。しかし、細かく見れば、不可分に関連するこれら四つの特徴において、各階層・各間層は、互いに、類似の上での相違を示している。職員と自営業者の間はもちろんのこと、農民と商工業者、生産労働者と事務労働者、常用工と臨時工の間にさえ、いわば副次的レベルで、「社会的生産体制のなかでの地位」・「生産手段にたいする関係」・「社会的労働組織のなかではたす役割」・「社会的の分けまをうけとる方法と分けまえの大きさ」の差異が存在する。つまり、これらのメルクマールについてみれば、基本的には二つに分かれるが、そのうえで、さらに下位レベルでの差異を認めることはできるし、また、われわれの課題にとって必要である。ただし、イギリスの社会学者 D. ロックウッドのように、「所有ということの階級的地位に関する一個の基準としての重要性」を認めながら「所有の差異以外の客観的な諸差異」を強調しすぎ、「用いられる階級の定義を正当化しうるのは、個々の具体的な出来事を説明する際のその有効性のみである」として、結局のところ、マルクス主義の階級概念に疑問を投げかけていることには、われわれの同意を与えるわけにいかない。

われわれは、所有一非所有の軸に決定的な重要性を認めただけで、生産手段との関係・地位・役割・所得などを、相互の関連を見失うことなく、具体的かつ詳細に、しかも資本主義発展の歴史的過程のなかで追究しなければならない。そのことによって、各階層の階級的条件が明らかとなるのである。そのために基礎的なインフォメーションを得るには、少くとも、次のような諸項目

- (1) 分布形態（人員・比率・産業・職業・規模・年令・性別分布など）
- (2) 就業形態（統営規模・系列所属・雇用形態・従業上の地位・労働空間・職種など）

(3) 所得形態（源泉・額・内訳など）

をしらねばならない。そのためには、国勢調査・労働力調査・就業構造基本調査・事業所統計・農家経済調査・毎月勤務統計・家計調査・消費者動向予測調査その他の官庁統計を利用することがある程度可能だし、階級構成表や賃金を中心とする労働者の生活状態にかんする諸研究成果を摂取することができるであろう。

しかし、われわれの根本課題は、中間層を歴史的・巨視的ダイナミックスのなかでとらえることにあったから、政治的行動と政治意識、さらにその基盤をなす生活意識・生活様式を直接・間接に規定する社会的諸要因を、中間層の階級的条件との関連においてとらえねばならない。したがって、この意味で、上に述べたような諸項目についてのインフォメーションを確実に得たのちに、各階層の階級的に規定された生活構造諸条件を明らかにしなければならない。そのうちとくに重要な項目としては、

- (1) 出身形態（階層間世代移動・生育地域・教育体験・職業移動など）
- (2) 参加形態（職能団体・労働組合・大衆組織・政党などへの加入・支持・投票行動・集会参加など）
- (3) 情報形態（情報源・マスメディアへの接触・交渉圏など）

などがあげられねばなるまい。これらは、階級所属と政治行動の間に介在する媒介的諸要因として仮定することができよう。これらの具体的な作用は、国際情勢との深い関連によって規定される体制的状况に応じて変化しつつ、ダイナミックに及ぼされると考えられる。われわれは、これら媒介諸要因の複雑な作用過程の実際のあり方を実証的に追求することによって、巨視的・歴史的ダイナミックスのなかで、立体的・多面的に中間層を位置づけることができるであろう。また、中間層を今日の状況のなかで＜反帝・反独占＞陣営への参加を促進せしめるには、どのようにして、どこにはたらきかけるべきかを知りうるであろう。そのような試みは、すでに行なわれてはいるのだが、いっそう科学的な研究の成果がもたらされるなら、いっそう正確で有効な実践的方向が明らかにされる——というのが、われわれの研究の前提的仮定であり、また希望でもある。（'65, 10. 7）〔本稿未完〕

註 26) ドリーユ、前掲論文、p. 31.

27) W. ロシエ；「民主主義のための闘争における労働者階級と中間諸階級の同盟」（カイエ・デュ・コミュニスム編、前掲訳書所収）

なお、ソビエトの諸研究も、たとえばシュネエルソンや科学アカデミーのそれの表題が示すように、「都市中間層」を特に扱っているのである。

28) cf. 日本女子大生活問題研究会「都市生活者の社会構成と貧困」（「社会福祉」8号、1961年3月）p. 12～13.

29) cf. ドリーユ、前掲論文、p. 32,

30) Академия Наук, СССР. Указ. соч. сяр. 236.

31) cf. カウツキー、「インテリゲンチヤと社会民主主義」（向坂逸郎・鳥海篤助訳「インテリゲンチヤその特質とその将来」所収、大衆公論社、1930年）
向坂逸郎「知識階級論」（改造社、1935）

32) Академия Наук СССР, Указ. соч. стр.236.

33) レーニン、「偉大なる創意」（レーニン全集、刊行委員会訳、レーニン選集、第7分冊所収、大月書店、1964年）、p. 317.

34) 程力群、前掲訳書、p. 47.

35) ロックウッド「現代の新中間層」（寿里茂訳、ダイヤモンド社、1964年）、p. 280.

Theoretical Problems of the “Middle Strata” Study in the Light of Sociology of Social Class

III Purpose, Object and Problem.

Résumé

In preceding chapters we have already confirmed some fundamental principles in our middle strata study. In this chapter our theoretical frame work is presented more concretely. Its conclusions are as follow :

- 1.) The middle strata problem is one of the most important problems which lie on the way to socialism. We have to describe the real feature of contemporary Japanese middle strata, who suffers from their own economic and psychological conditions that derive from the mechanisms of Japanese capitalism. Through this it will be possible for us to contribute theoretically to the further development of the anti-monopoly struggle.
- 2.) The concept of the middle class is rather vague, and its easy application can't go without danger, because the social categories which are called “middle class” are really heterogeneous, and it is difficult to find in it a unity as an independent social class. We should rather apply another concept, that is, the middle strata.

None can doubt that there are some intermediate sections in the class structure of the capitalist society. From the marxist point of view fundamental classes are only two. In each of them, however, there are various sub-categories which we would like to call “social strata”. In our definition, then, the middle strata are such social categories that are lying between the pure bourgeoisie and the pure proletariat.

3.) It is evident that such strata are different from each other in various aspects, for example, their status and role in the capitalist production system, the origin and the amount of their incomes, the place and the style of their work, and so on. At the same time, however, there is a relative resemblance or commonness, under some social conditions among them. And then our problem is to analyse not only the heterogeneity but also the homogeneity of Japanese middle strata, and, by means of gradual accumulation of useful information, it will be possible for us to examine the possibility of more active participation by members of each middle stratum in the anti-monopoly struggle.

Some methodological problems, which will derive on the process of the multi-side approach to the life conditions of the middle strata in the context of class dynamics of contemporary Japanese capitalism, will be discussed intensively in the next chapter. (Continued)